



繪本雪鏡談

九

Λ13
4436
9



113
4436
9

繪本雪鏡談卷之九

目錄

○ 忠術代飲く大月刺密依用る活

有月海身之密が術代試る圖

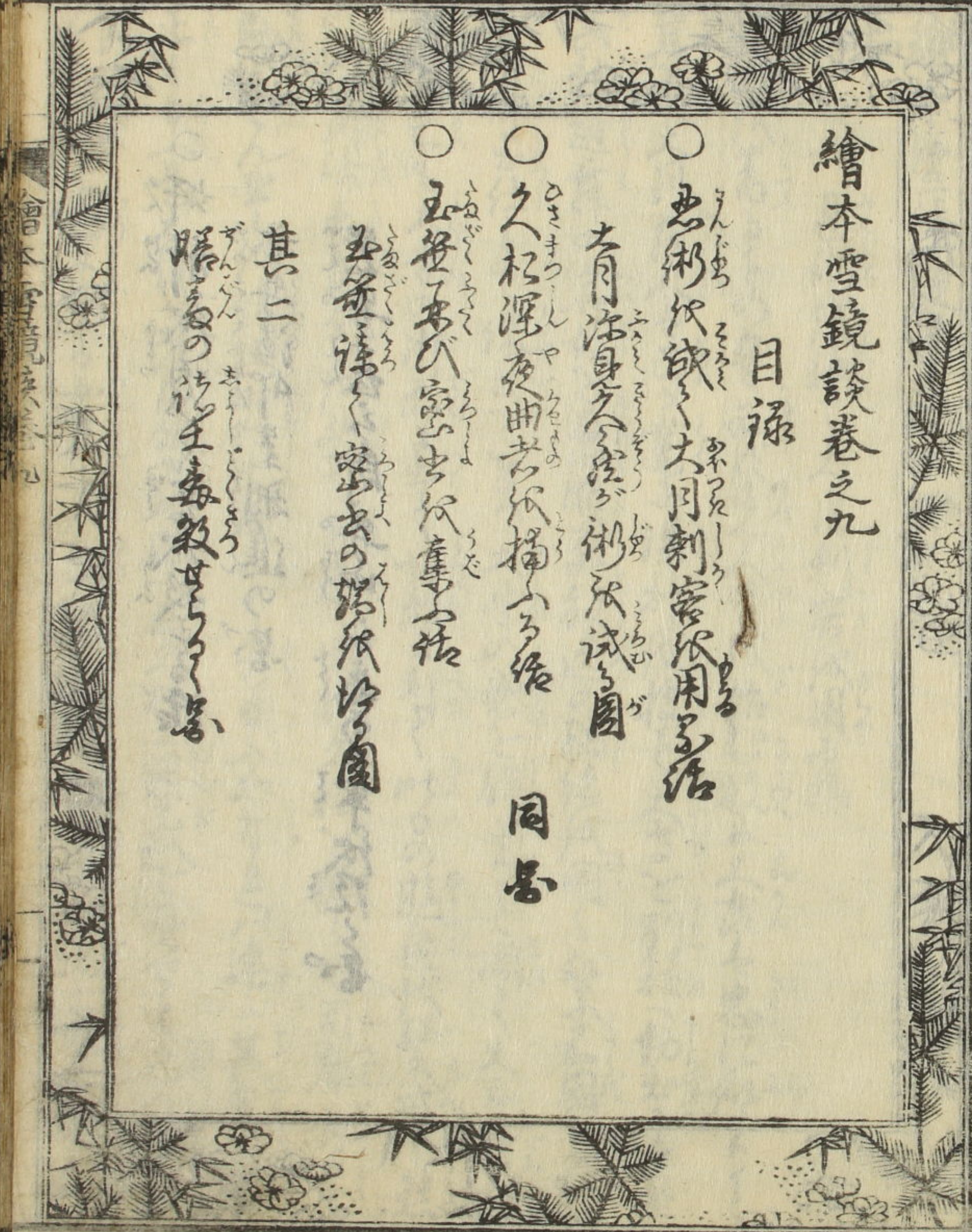
○ 久松深夜曲者依挿ふる活 同書

○ 玉登之者ひ密士依奪る活

玉登之者ひ密士の密依挿る圖

其二

贈るの活に玉登之者ひ密士



繪本雪鏡談卷之九

集本屋

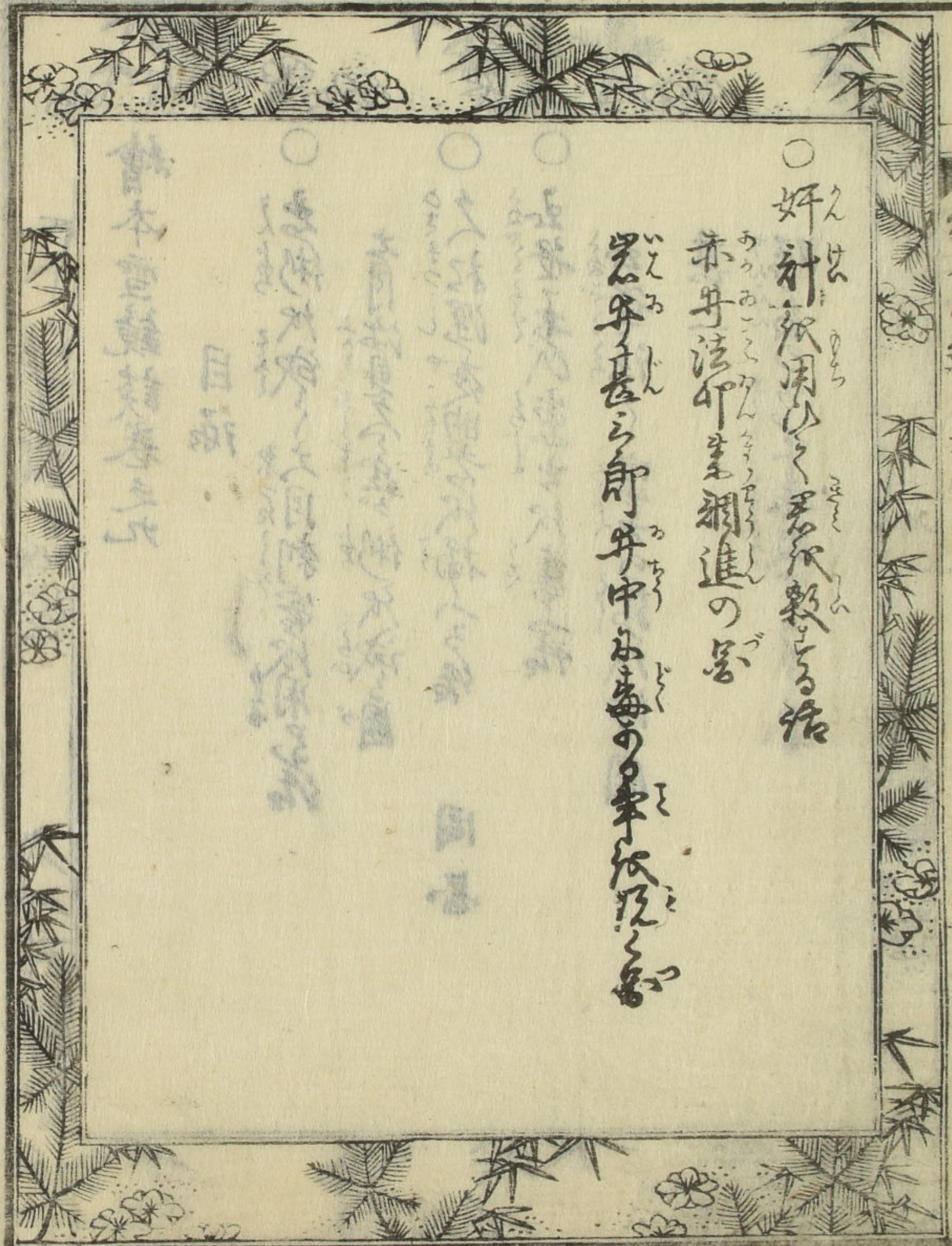


繪本雪鏡談卷之九

悪徳試て大月刺密依用る所

其者大月系人己が當小謀計代授く大守と別結(物出)其
長秋道舞の名妓と愛頗る放逸の端結代用く如小尾園も之松
三五郎出仕して徳云とあり大守の感と解らうと聞く大月系は
親者己も大守の御前より好形と却り此の遊無代孫を戒(徒
は御後川崎吉良守代若て介衛)退け久松と稱して同庫官常
勤くせん事代徳鏡時々も固心一奇のり知れど(連)其妻貞守
正し(是)大月が若居(女)の圖(且)之松(恩)義と見せ(己)が妻
引入ん(之)忠(知)る(若)居(女)は(愛)せ(ぬ)故(中)の(徳)士(忠)義(の)途

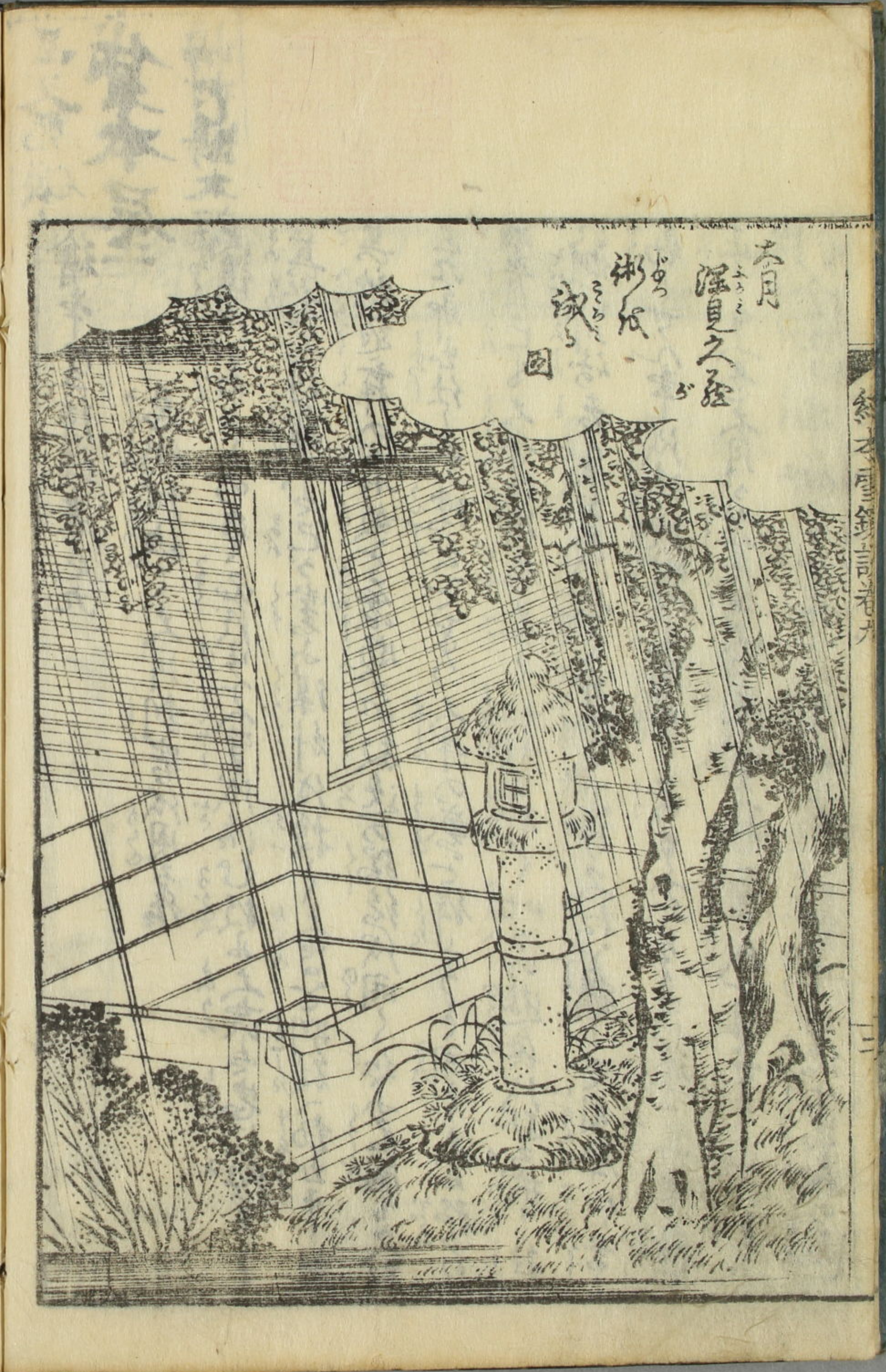
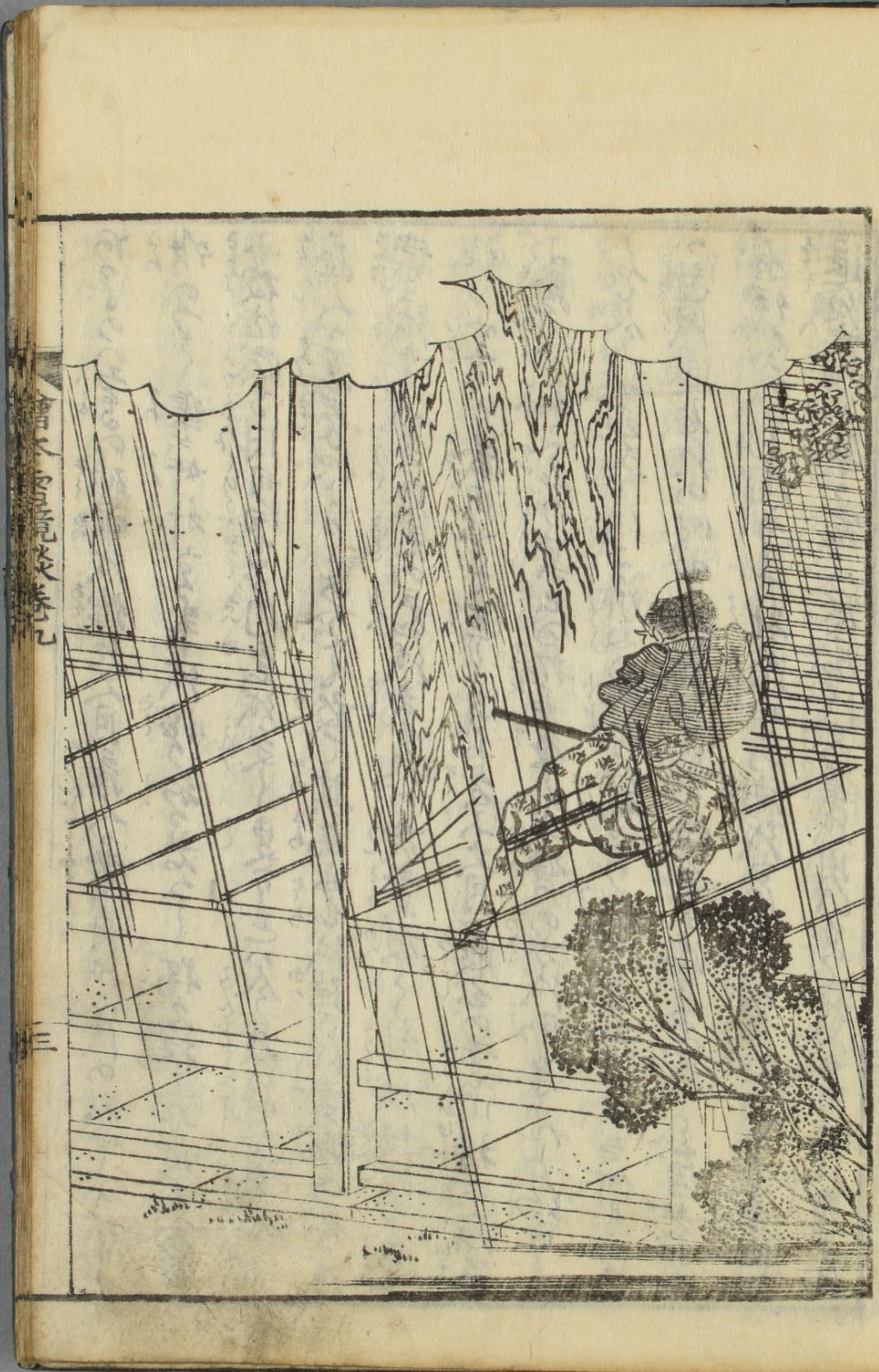
繪本雪鏡談卷之九

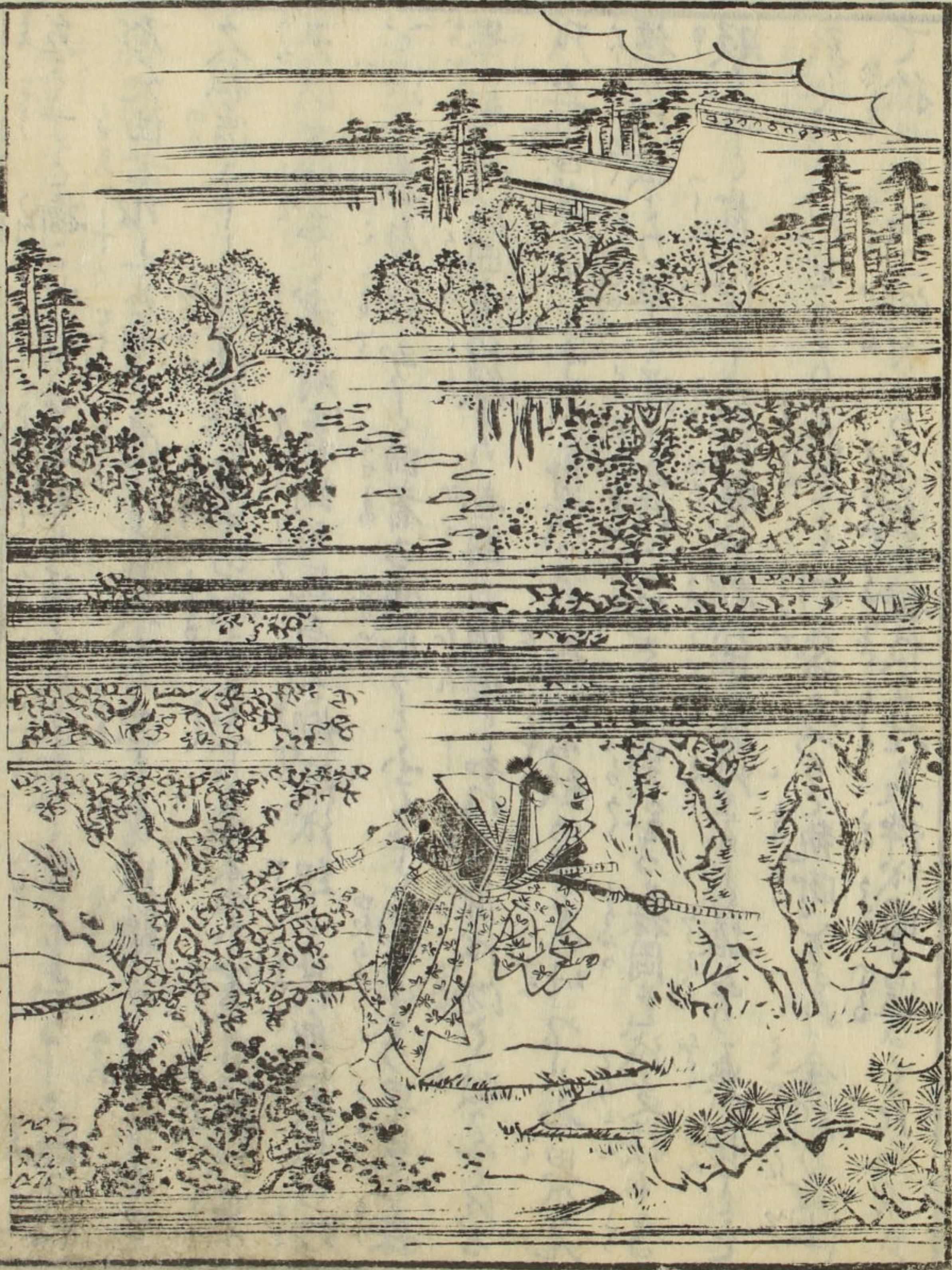


○奸計依用ひく若代敷る所

赤丹法印(主)彌進の云

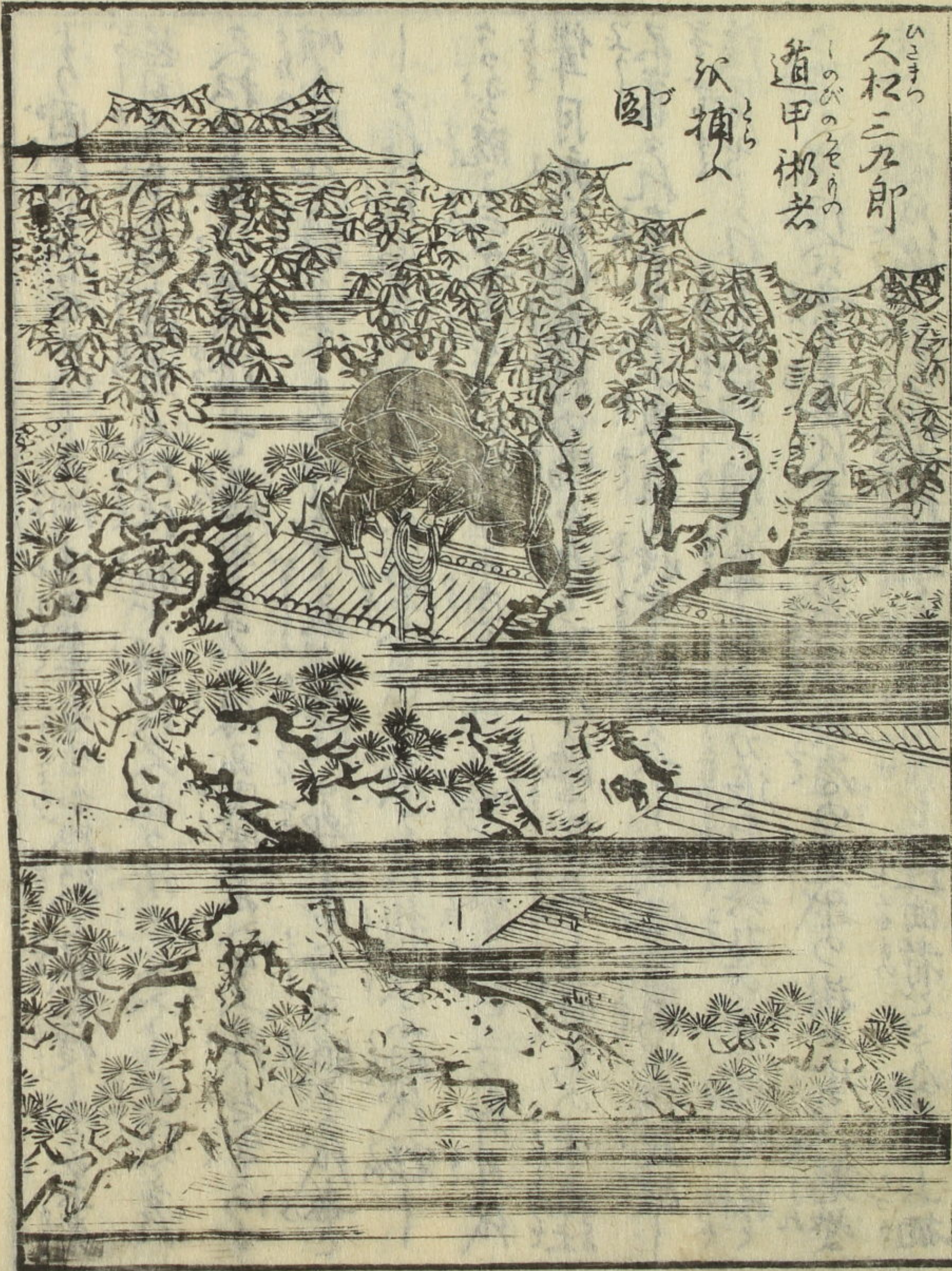
忠年甚ら即(中)み毒の事(及)及(云)





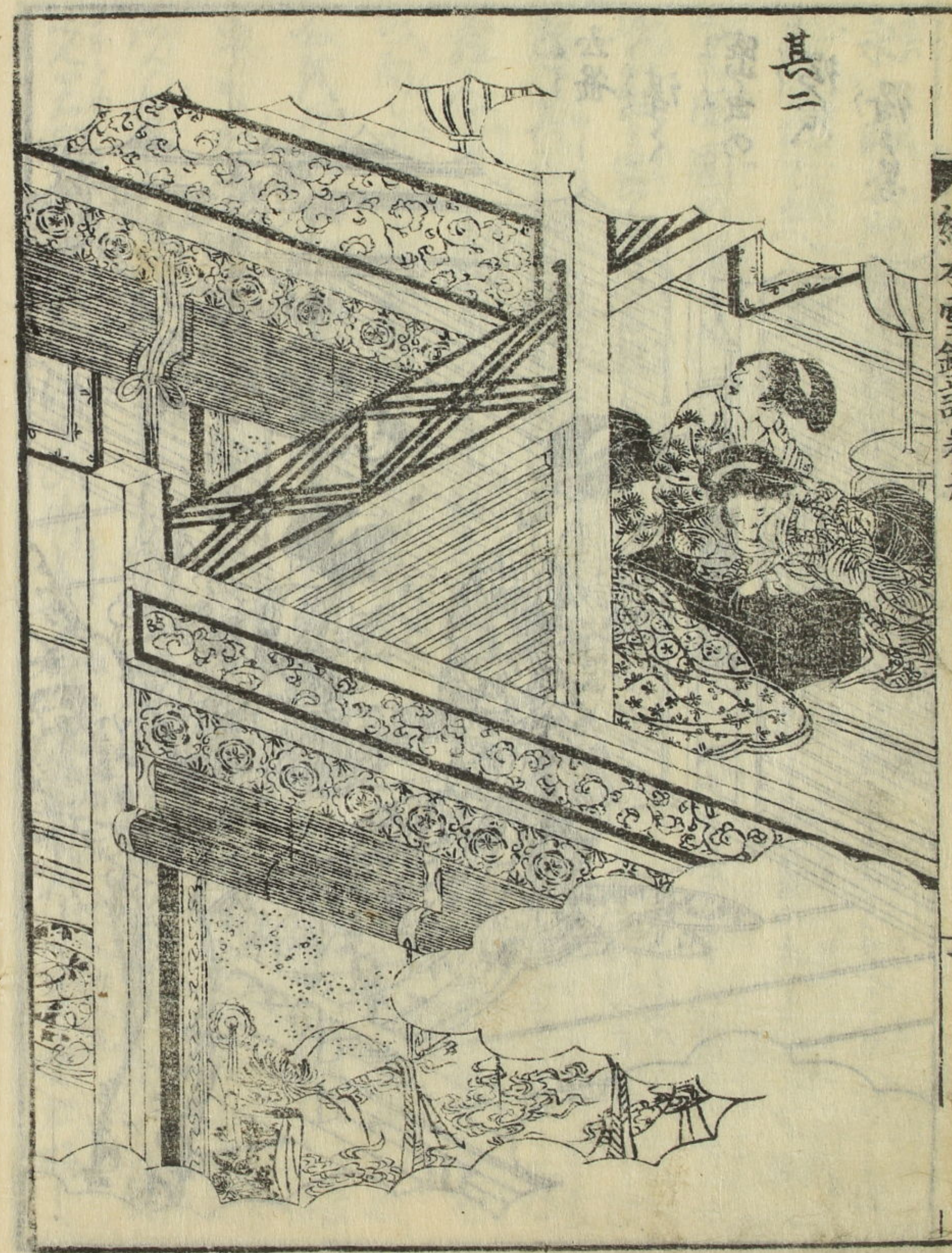
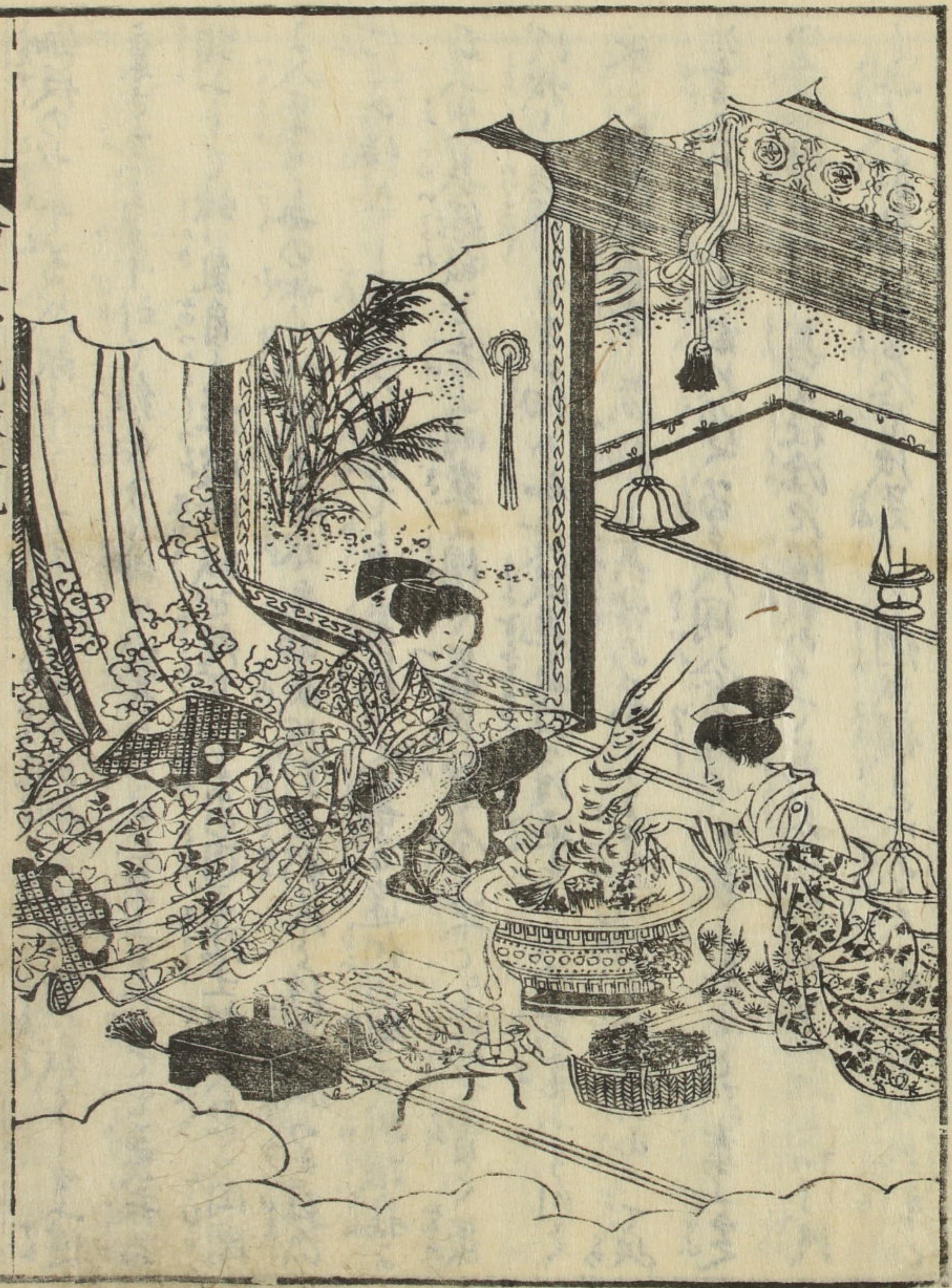
久松三九郎

十



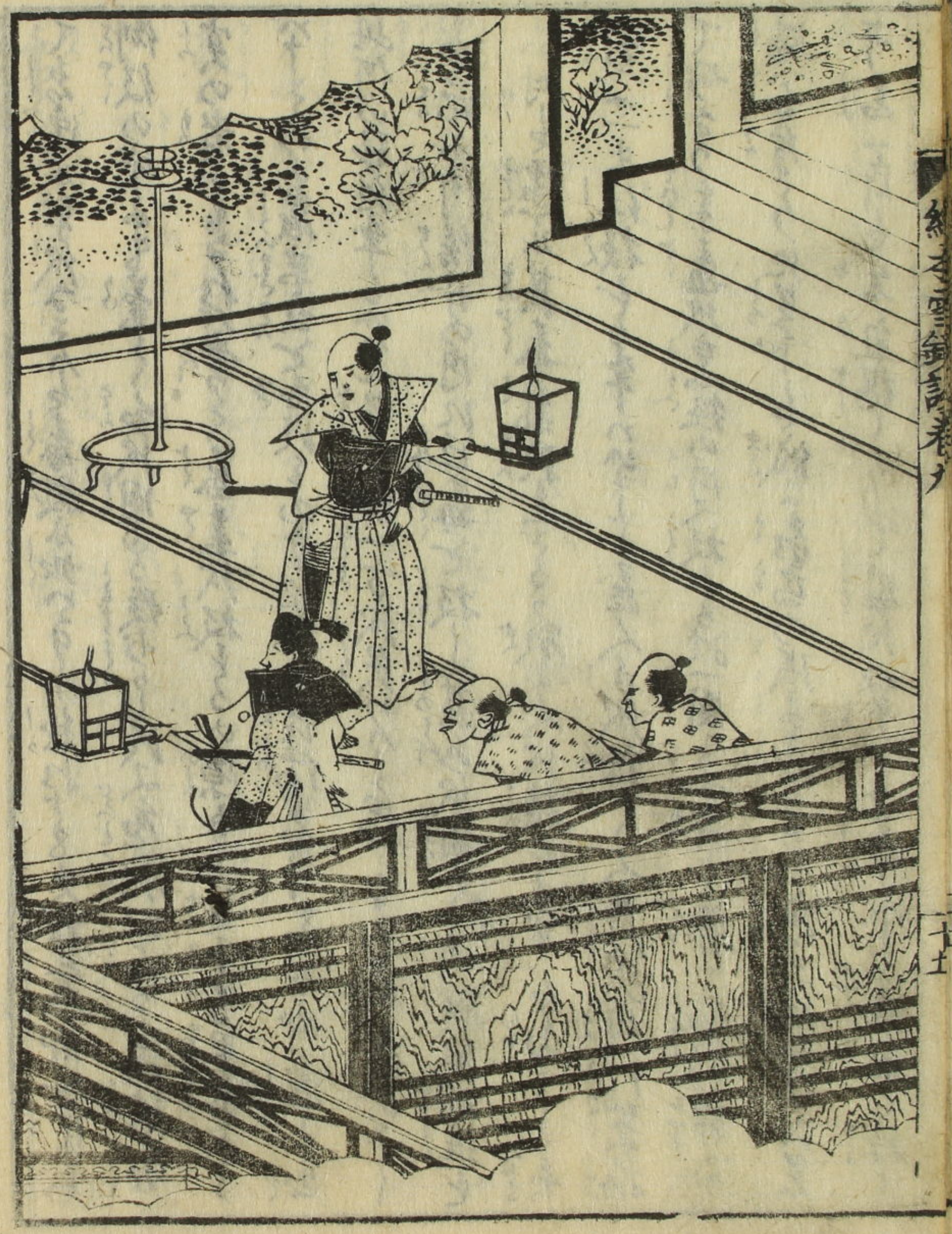
久松三九郎
道甲柳老
図

繪本風鑑言卷八



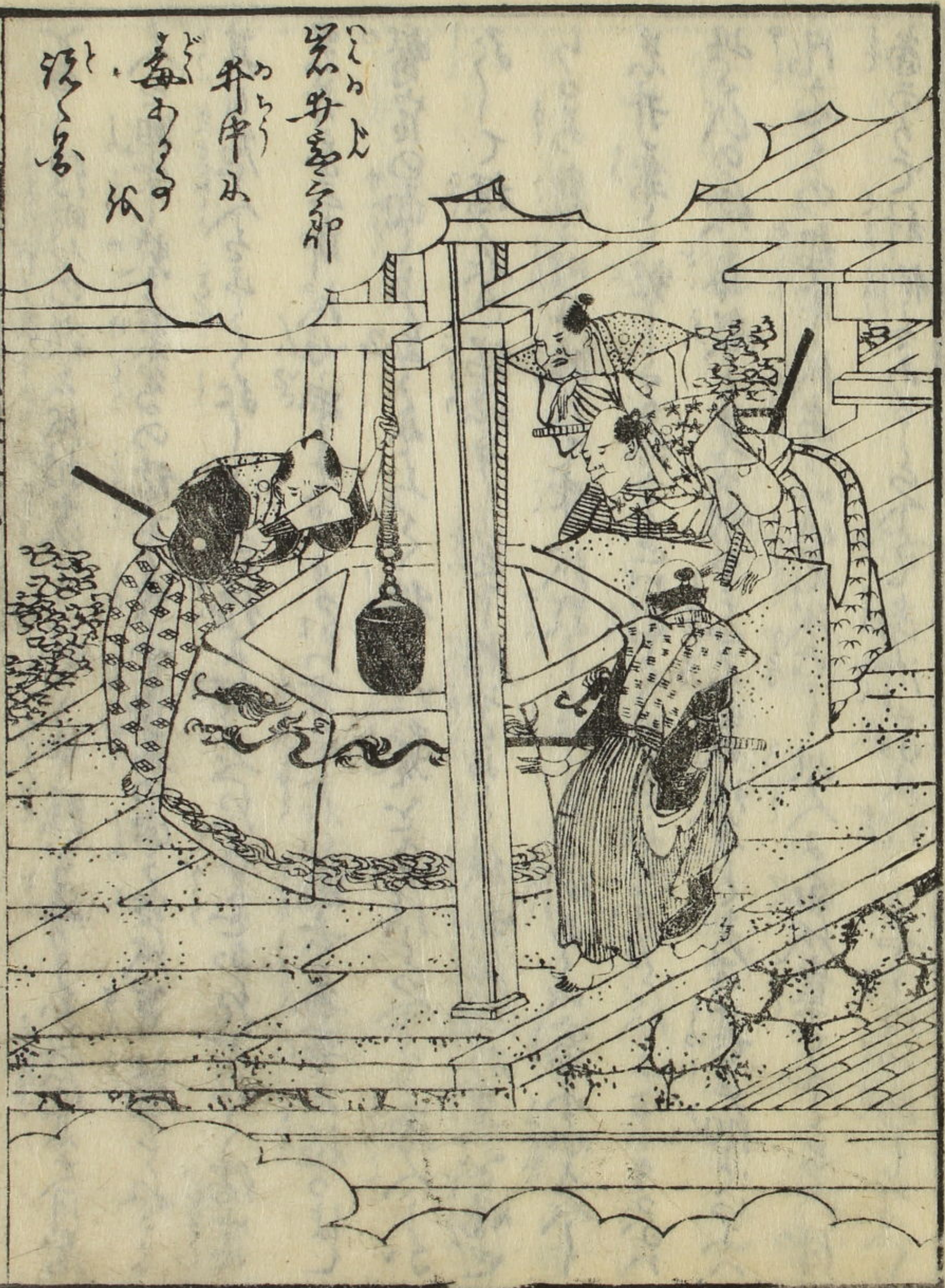
家書次出〜一此灰出お投して一塊の灰垣とぞりける此時中もて
 玉置と張帯ち履の〜侍嬢難決は燭灰とせ末の香房と巡視
 するの奥の方か方て俄は集儀氣盛に起すは後坪子の火灰火入
 やと難言れも其幸と披性ふ末に〜之の方此房はより浅出は
 汗流も入ぬと情不〜何人侍女等は伏し音もぬく遙く之の
 方後枝が密潜秘文の同く玉置並異〜病ふ難決は淫火合免其
 身と房も降と消息灰はぬけ時難決と遠く〜之の方此房は入後
 枝とぬと事と持ぬる玉置と儀は持病の積衆も惚りま折あり〜
 集断〜之何れもあは下法く事下〜の半〜と息も後放は
 云々六流石の言の方後枝も佛〜之夜中と云々感
 せん此や若らん彼やぬるき〜俱且高の事と推〜一包の丸又灰

傍る難決は此序の例は身且玉置が案小道〜火盛の月は焚勢たは
 後一塊あり〜後と後且今何れも持降也世も是灰見と其
 玉置大ぬけ火時〜是灰展〜ぬ救ぬの書通次被破〜火も投〜系
 銘りあ〜文面建統は半〜分昭〜は〜とも投〜改尾の等記を
 難人新中〜或は由吉の半とも〜難人へ過〜ら〜の文梓詞〜ふ
 抄〜六玉置不志様も灰相置は〜氣の石置ぬのひ〜杖及ひ
 難念と〜相定の方由方上の事灰傳〜付託あり〜何の場〜此
 土面〜若初〜之の方此末〜之月氏ぬぬ定〜ら〜新〜も〜は〜次
 く難〜半社安〜ぬ此〜一難冷ぬ名の清ぬ〜も人〜社
 出政の率居〜河連枝はぬ〜の後〜控〜た〜る服僅〜りお〜灰
 南嶽の元居〜儀の人〜一技流〜後〜の禱と後〜た〜た〜深〜く〜知〜ら〜る〜



家祖の一方は浦に異法を成る内異例類より一撃叫びのそ
 希しく早鮮血七竅より噴出須臾して終に逝去しその六月
 孫人此若代同より中々小ほび病中より出たり然るに平くおの
 孫附の逝去の程状代何の身より正しく法下の時空も遠くは毒
 以中より身入て渾身赤く此黒の毛爪取く其後衆長爪持て
 畢持の空爪を以て只茫然と果すの介か一人故く大々發した
 たる伴瓜さし此後半ありて正しく毒代勅する賊あんま未一症候
 とうはてし其日後合の例及及の事通瓜は今日内動解と死
 同のる小膳の毒味候と姑所後細進ありる若れと十一人毒く
 血爪吐く勢うると同孫人眉爪頰れ今日の為伴更なる事の事
 ふゆ氏其若而已やく半代更への後証計証し先其方瓜は其

中上洲一統の高嶽小寺一と即時小若候と以て半の候牙と家
 小若き瓜は遠家ともい終りたのハ種く舊瓜取く方十を松田出を
 高岡山城古南々志人高井右系主史物名伴實吉瓜始して水
 一門の方く者く舎合ありて通一は動解候居向の玉ハ衆派匿くお
 てよりふ松田出雲吉原作より方今行附の遊去の始末必き毒菓の
 お高き見よれども遠く不實數金とはせし愛死の程状代門に遊く
 ハ一大半あり先を痛ありと披露し毒を嬌まわるとれハ金身對馬
 吉原度候はく書きし一襲封候程ハ其後後く半代正氏方終
 危うんと衆議を以て一吹く長門吉原村を痛より舎身對馬守
 経度 儀例々の二男 瓜はく経目取もる故と是利赤一建し瓜は
 なく津守の命より六松門の徳慶敏中の徳生より安坂の瓜は



いかに
 岩舟を
 井中
 毒
 名

會下雪鏡火卷九



繪本雪鏡火卷九

とき一様時々の遊去は披露し結く中法と違ひ多し此間は大月
 人の親業は家業の徳士と存す毒業の害を言ひ穿鑿し
 其日危人をとらむに死し道は他は探るべしをあらとせし
 忠井を三郎は忠実にて中々方今君の遊去毒害は極るはし
 醫官の面より出さぬと種々詮議とらふと下も危人
 ありて探るべきは徳士と定下情をみし徳和徳の故業と
 りるあ斯る時は降んで半は死し正なる例ありて家業承るべし
 忠井業を移し知るは徳と思ふも及ばずと中々方
 此の後の毒業と身の時を言ふべきは其方と存其子細と
 凡そこの親業は生るは徳は亡し此人は家業承るべし
 ありて針例をあるとらむもあつたは徳とせし
 又忠井毒業一もんと針例のたゞは徳の肉一種は毒業と
 進むれば救ふの人は時ふは徳なりたるは徳と身の時を
 害し中々徳く困る徳業とらむは忠井より毒業とらむの
 ともは徳なり徳り毒業めは徳なり徳業とらむは徳なり
 徳の大月毒人は痛美し徳なり徳業の徳を徳の徳
 徳なりと徳一徳し徳し徳し徳し徳し徳し徳し徳し徳し
 とせし止みり

又忠井毒業一もんと針例のたゞは徳の肉一種は毒業と
 進むれば救ふの人は時ふは徳なりたるは徳と身の時を
 害し中々徳く困る徳業とらむは忠井より毒業とらむの
 ともは徳なり徳り毒業めは徳なり徳業とらむは徳なり
 徳の大月毒人は痛美し徳なり徳業の徳を徳の徳
 徳なりと徳一徳し徳し徳し徳し徳し徳し徳し徳し徳し
 とせし止みり

繪本雪鏡談卷九

